

群馬県内における縄文時代前期の異型式土器

谷 藤 保 彦

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- | | |
|-------------------|---------------|
| 1. はじめに | 4. 前期後葉の異型式土器 |
| 2. 前期初頭から前葉の異型式土器 | 5. 異型式土器の様相 |
| 3. 前期中葉の異型式土器 | 6. おわりに |

— 要 旨 —

群馬県内出土の縄文土器については、南関東を中心とした土器型式・編年が用いられることが常であったが、昭和50年代後半以降に急増した資料には、いわゆる関東編年にそぐわない土器の存在が明らかとなった。特に、前期中葉期に有尾式土器が黒浜式土器と共に多く出土することは、それまで全く知られていないことであった。その後、長年にわたって開催されてきた縄文セミナーを通じて、群馬県内を含めた土器型式細分・編年、地域間の交差する広域編年は、今日的に明らかとなってきた。

本稿では、前期における広域土器編年および型式間交渉を明らかにするべく、群馬県内から出土する異型式土器・変容した土器の抽出と共に伴関係の事例を確認し、各時期での様相を明らかとすることができた。その結果、これまで知られていなかった遠隔地との関係、今後に注意を要する土器についても指摘することができた。大きく第一点として、前期初頭期において花積下層Ⅰ式と塚田式土器が共にあり、極楽寺式酷似土器や石製品の石材から北陸との関係も興味深い。また、花積下層Ⅲ式と木島Ⅷ式土器からは、東海から静岡県にかけた地域との関係、さらに木島式から変容したと考えられる薄手縄文施文の土器等が今後に問題を残している。第二点として、前葉期においても神ノ木式土器はもとより、布目式土器、中越Ⅲ式土器、清水之上Ⅱ式土器、そして大湊式土器等が散見でき、今後に注目すべき土器である。第三点として、中葉期では植房式土器や大木2a式土器もさることながら、上ノ房式土器、朝日C式に見られる器形の土器、北白川下層式土器、そして釧廻堂Z3式土器等にも注意を要する。第四点としては、後葉期における周辺諸型式土器との比較検討もさることながら、蜆ヶ森式土器からの系統を示唆される横位擦痕の土器が、少量ずつながらも県内に広く分布していることに注目する必要がある。

キーワード

対象時代 縄文時代

対象地域 群馬県

研究対象 前期の異型式土器

1. はじめに

群馬県内の縄文土器研究は、縄文セミナーがその一翼を担ってきた。そこでは、群馬県を中心とした周辺地域の土器の実態を明らかにすると共に、各地域での時間的位置付け(新土器型式の設定も含む)、地域間の広域交差土器編年の確認、さらに各土器型式における型式間交渉、といった視点を基に回を重ね、多くの研究者による発表・討議が毎回行われてきた。前期の土器に関しては、「第1回縄文セミナー 縄文前期の諸問題」(1987)、「第7回縄文セミナー 早期末・前期初頭の諸様相」(1994)、「第10回縄文セミナー 前期中葉の諸様相」(1997)、「第12回縄文セミナー 前期後半の再検討」(1999)、「第19回縄文セミナー 前期前葉の再検討」(2006)、「第23回縄文セミナー 縄文前期浅鉢土器の諸様相」(2010)、「第24回縄文セミナー 縄文前期土器研究の現状と課題」(2011)、「第29回縄文セミナー 縄文前期後半の型式間交渉の諸問題」(2016)、「第30回縄文セミナー 縄文前期中葉の型式間交渉の諸問題」(2017)と、計9回もの回を経ている。しかし、これで全てが討議し尽くされたわけではなく、新資料からの再検討等、検討する内容はまだ多く残されているのが実情である。

群馬県内出土の縄文土器については、南関東を中心とした土器編年の型式が用いられることが常であったが、昭和50年代後半以降に急増した調査資料には、いわゆる関東編年にそぐわない土器の存在が明らかとなった状況がある。こと前期では、三原田遺跡での花積下層I式に塚田式土器が、花積下層III式に木島VII式土器、関山II式に神ノ木式土器、黒浜式に有尾式土器・大木2式土器・植房式土器、諸磯b式に浮島式土器・大木4式・北白川下層II式土器、諸磯c式に興津式土器がそれぞれ伴出することが知られることとなった。中でも、花積下層I式期に塚田式土器が群馬県北西部にまで大きく分布域をもつこと、同様に分布域を広くもつ有尾式土器が知られ、群馬県内の土器様相が南関東や東関東とは異なることも明らかとなっている。近年では、少量ではあるが布目式土器や中越式土器、釈迦堂Z3式土器等といった群馬県外に主体をおく土器も確認されている。さらには、他地域の土器文様が変容した土器の存在も明らかとなっており、そうした土器の抽出には苦慮することが多い。また、各回の縄文セミナーにおいても取り上げて討論されてきた事項でもある。

本稿は、こうした他地域の土器型式が介在する状況を再度明らかとし、県内の前期土器群を扱う上で注意を要する土器であることを指摘しておきたい。取りも直さず、縄文社会を考える上で、各地域および地域間を含めた広域な時間軸の確認は基より、分布、変容のあり方等々から、地域間における土器の交渉の姿を導き出す基礎的な作業の一環と捉えている。

2. 前期初頭から前葉の異型式土器

群馬県内の前期については、前期初頭を扱った第7回縄文セミナー「早期末・前期初頭の諸様相」(1994)において花積下層式をI～III式の3細分が示され、編年上では花積下層式I式に塚田式、下吉井式、木島VII式が、花積下層III式に中道式、中越I式、木島VII・VIII式がそれぞれ併行関係にあるとされた。この併行関係については、その後も各地の遺跡で確認されている。続く前期前葉を扱った第19回縄文セミナー「前期前葉の再検討」(2006)では、二ツ木式に中越II式、布目式、木島X式が、関山I式に中越III式、新谷段階の土器群、関山II式に神ノ木式、中越IV式、清水之上II式等々の各型式が併行関係にあるとされ、さらに関山II式新段階(井沼方段階)には有尾式の最古段階が併行するとの見解も示してきた。

では、群馬県内の遺跡から出土する土器はどうであろうか。次に、既存の花積下層I～III式、二ツ木式、関山I・II式の各土器型式に、遺構内で共伴する異型式土器を抽出してみたい。

〈前期初頭期〉

県内における前期初頭期の調査事例(特に花積下層式I式期)は急増し、前橋市今井見切塚遺跡や同市萱野II遺跡、長野原町林中原I遺跡、最近では長野原町上原I遺跡で花積下層式I式期の住居が14軒も検出される等、概期資料の増加が著しい。

以下、異型式土器を出土させた各遺跡の事例を確認する。

長野原町坪井遺跡(第1図1～12)

SI 12(住居)から花積下層I式土器と共に1の塚田式土器1点が出土し、SK18(土坑)では8の極楽寺式に酷似する土器が花積下層I式土器と共に伴している。また、SK35(土坑)では、12の花積下層I式土器と11の塚田式土器が共伴している。8は口縁下に撲糸圧痕による横位八字状の短沈線状文様が数段施されており、所謂極楽寺式土器の文様に酷似する土器である。この出土事例をもって、花積下層I式に塚田式、さらに極楽寺式が併行関係にあることを、筆者は以前にも指摘している(谷藤2001、2006)。

長野原町上原I遺跡(第1図13～32)

花積下層I式期の住居14軒からなる集落で、花積下層I式土器と塚田式土器が住居から数多く出土している。群馬県埋文事業団調査では、81区1号住居で13の花積下層I式土器と14の塚田式土器が共伴し、同様に81区2号住居でも塚田式土器が共伴している。遺構外からも、15～19の塚田式土器出土が出土している。また、町教育委員会調査では、SI19(住居)で花積下層I式土器と21の塚田式土器、同様にSI22(住居)で24、

SI23(住居)で29、SI25(住居)で25・26、さらに遺構外遺物に31・32といった塙田式土器が出土している。これらの中、26や31は波頂下の垂下隆帯と口縁下を巡る隆帯とでT字状隆帯を構成させる塙田式の特徴と、口縁部文様に撫糸側面圧痕を多用する花積下層I式の施文文様を併せもつ土器であり、局地的に変容した状況が窺える。SI25の25・26も同様であろう。

長野原町林中原I遺跡(第2図33・34)

52区1号住居では、花積下層I式土器と34の塙田式土器が共伴している。

長野原町三平II遺跡(第2図35)

遺構外出土であるが、35の塙田式土器が1点出土している。

長野原町居家以岩陰遺跡(第2図36・37)

岩陰の前庭部緩斜面からは、36・37の塙田式土器が出土している。

安中市新堀東源ヶ原遺跡(第2図38~45)

75号住居からは、38~41・43の塙田式土器が出土している。

安中市横川大林遺跡(第2図46~52)

遺構外出土であるが、46~50の塙田式土器が出土している。

渋川市三原田城遺跡(第2図53~76)

2~4・6・10号住居で、花積下層III式土器と共に木島VII式土器が出土している。136号土坑からも木島式土器が出土している。また、4号住居の58・59および9号住居の67~69は無纖維の薄手土器で、口縁下の段部に摘まみ状の刺突列をもつ土器であり、木島式の特徴(摘まみ状の刺突列)を併せもち、施文される縄文が非結束羽状であることから布目式土器とも異なる。なお、遺構外出土の中に、先の土器と同様な口縁下に摘まみ状の刺突列をもつ土器があり、胎土に纖維を若干含み、器厚もやや厚い。

列記した遺跡以外にも、塙田式土器や中道式土器を出土させている遺跡として、長野原町横壁中村遺跡、嬬恋村今井立石遺跡等々がある。

〈前期前葉期〉

前期前葉期の調査事例も増加し、二ツ木式期では渋川市上白井西伊熊遺跡や同市中郷遺跡、前橋市上泉新田塙遺跡、関山式期においても渋川市金井東裏遺跡や安中市三本木遺跡等々、多くの遺跡で住居が検出され、資料は増加の一途をたどっている。

以下、異型式土器を出土させた各遺跡の事例を確認する。

長野原町上原I遺跡(第3図77・78)

遺構外出土であるが、77・78の布目式土器が出土し

ている。波状口縁の口唇部に爪形刺突をもち、口縁部帯が肥厚ぎみとなり、頸部が段状に屈曲する屈曲部に爪形刺突が巡り、原体幅の短い状文が施される土器である。同時期の土器には、遺構外から二ツ木式土器がある。

長野原町居家以岩陰遺跡(第3図79~81)

岩陰の前庭部緩斜面からは、原体幅の狭い結束羽状縄文を施した79・80の布目式土器、束の縄文を施した81の神ノ木式土器が出土している。

長野原町榆木II遺跡(第3図83~87)

2号住居からは、83の布目式土器が出土している。また、遺構外出土には、84の布目式土器、85の木島式かと思われる土器、86・87の表裏面に指頭圧痕を残す木島IXないしX式土器がある。

長野原町三平II遺跡(第3図82)

遺構外出土であるが、82の口縁部に刺突列を数段巡らせ、胴部にループ縄文を施す土器は、新潟県の大湊式土器に近似する土器文様である。

渋川市見立峯遺跡(第3図88)

J11号住居から88の1点が出土しているものの、共伴土器はない。88は布目式土器に後続する新谷段階の土器であり、同遺跡での他の住居出土土器(二ツ木式)よりもやや新しい時期のものとなる。

渋川市勝保沢中ノ山遺跡(第3図89)

遺構外出土であるが、89は口縁下にずらせ手法による縦位櫛歯状刺突を施文する土器で、その施文特徴から神ノ木式土器である。

渋川市西ノ平遺跡(第3図90~93)

J1号住居では、関山II式土器と93の清水之上II式土器が併出している。この93については、草山式土器との見解もある(増子2017)。

渋川市下箱田向山遺跡(第3図94~99)

5・8号住居では、関山II式土器と共に96・97・99の束の縄文を施した神ノ木式土器が出土している。

安中市野村遺跡(第4図100~115)

J35号住居の100・103~105、J45号住居の106、J47号住居の109は、関山II式土器と共に神ノ木式土器である。J50号住居の113は清水之上II式土器で、関山II式土器と共に伴している。また、遺構外出土には、114・115の神ノ木式土器がある。

安中市人見大谷津遺跡(第4・5図116~129)

2号住居の118~121、7号住居の124・125、8号住居の128・129は神ノ木式土器であり、胎土に纖維の有無はあるが、いずれの住居においても関山II式土器と共に伴している。

安中市三本木遺跡(第5図130~146)

J9号住居では、関山I式土器に132の波頂下に垂下隆帯をもつ無文薄手の中越式土器が共伴している。

J 15号住居でも関山I式土器に134の裏面指頭圧痕の中越式土器が、J 18号住居においても関山I式土器に135の尖底となる裏面指頭圧痕の中越式土器が共伴している。また、J 23号住居では、140・141の薄手で口縁部に爪形刺突をもつ清水之上II式土器が出土している。さらにJ 43号住居では、関山II式土器と145の神ノ木式土器、146の清水之上II式土器が伴出している。

列記した遺跡以外にも、神ノ木式土器を出土させている遺跡として、下仁田町吉崎遺跡、安中市中原遺跡、同市清水I遺跡等々がある。

3. 前期中葉の異型式土器

第1回縄文セミナー「縄文前期の諸問題」(1987)、埼玉考古学会シンポジウム「黒浜、有尾、そして大木」(1990)、第10回縄文セミナー「前期中葉の諸様相」(1997)を含め、この時期の土器論については実に多くの論考がある。その中には、概期土器群の細分論だけではなく、土器の名称等の問題、広域な土器編年の確立について、各研究者の立場で説かれてきた。さらに、近年に至っては、富山県小竹貝塚出土土器によって北陸での概期土器群の様相が明らかとなり、第30回縄文セミナー「縄文前期中葉の型式間交渉の諸問題」(2017)が開催されるなど、新たな展開を迎えていている。

いずれにせよ、概期の群馬県内の状況は、黒浜式土器と有尾式土器との共存は疑うべくもなく、数多くの遺跡で確認され、周知のこととなっている。そこで、ここでは有尾式を除く他型式土器を対象とした。

以下、異型式土器を出土させた各遺跡の事例を確認する。

みなかみ町善上遺跡(第6図147・148)

JP34から、黒浜式新段階と思われる土器と148の寸詰まりな縄文施文の土器が出土している。

昭和村糸井宮前遺跡(第6図149~158)

116号住居では、有尾式新段階の土器と153の小波状が連続しながら口縁部文様に波状コンパス文を施す大木2a式に類似するような土器、151の網目状撚糸文を施す型式不明な土器、152の胴部最大径の位置が底部となる朝日C式にも見られる器形に近似する土器が出土している。143号住居では、黒浜式土器と有尾式土器、157の網目状撚糸文を施す土器、158の無纖維で無文の土器が共伴している。

昭和村中棚遺跡(第6図159~163)

NJ12号住居では、有尾式中・新段階の土器と160の緩い波状沈線(条線状)を全面に施す植房式類似土器、162の5単位波状口縁を呈する大木式土器の口縁形態

に近似する土器が共伴している。遺構外出土ではあるが、163は6単位波状口縁を呈し、緩い波状コンパスモンや網目状撚糸文を施す土器で、大木2a式土器である。

みどり市瀬戸ケ原遺跡(第7図164~169)

J 1号住居では、黒浜式中段階の土器と166~169(同個体)の大木2a式土器が共伴している。

前橋市横沢向田遺跡(第7図170~175)

J 3号住居からは多くの有尾式新段階の土器と黒浜式中段階の土器が出土する中、175のやや異色な土器が出土している。この175の特徴は、胎土に纖維を含まず雲母を混入し、表面の口縁以下には縄文を浅く(軽く)施文し、裏面には指頭圧痕が明瞭に残る。この特徴が一致する土器型式として釧迦堂Z3式が挙げられ、同型式土器が埼玉県での出土も知られていることから、175は釧迦堂Z3式とすることができよう。

安中市行田大道北遺跡(第7図176~183)

46号住居では、黒浜式中段階の土器と178の大木2a式に特徴的な網目状撚糸文を施す土器が出土している。81号住居では、黒浜式新段階の土器と182の横位沈線間に刺突を施す土器が出土している。この182は、富山県小竹貝塚や新潟県津南町周辺にも見られる刺突施文に酷似する土器である。また、395号土坑からは、183の大型爪形刺突を密接させて施文した北白川下層IIa式土器も出土している。

安中市行沢梅木平遺跡(第7図184・185)

398号土坑からは、184・185の胴部最大径の位置が底部となる小型土器が出土している。

富岡市大牛下原遺跡(第7図186~194)

108号土坑からは、黒浜式新段階の土器と189~194が共伴している。この189~194も無纖維の胎土に雲母を混入し、裏面に指頭圧痕が明瞭に残る釧迦堂Z3式土器である。他の遺構においても、裏面に指頭圧痕が残る土器を散見できる。

列記した遺跡以外に、高崎市神保植松遺跡から遺構外出土であるが上ノ房式土器が出土している。

4. 前期後葉の異型式土器

前期後葉期の群馬県内には、浮島式土器や興津式土器、大木式土器、北白川下層式土器が出土することは、以前より知られていたことである。また、前橋市上大屋遺跡やみなかみ町小仁田遺跡等から出土した北白川下層II式の土器文様の特徴を持つ土器をもって、「上大屋類型」とする土器群の指摘もなされている(鈴木1996)。そうした中、第12回縄文セミナー「前期後半の再検討」(1999)、さらに第29回縄文セミナー「縄文前期後半の型式間交渉

外から刈羽式土器が出土している。

安中市人見大谷津遺跡

図示していないが、11号土坑では諸磯c式古段階の土器と大木式の鋸歯状貼付文がつく土器が共伴している。

安中市行沢梅木平遺跡(第12図292・293)

83号住居の293は北白川下層II式から変容した中部高地の「糠塚類型?」(鈴木1996)的な土器で、諸磯b式中1段階の土器と共に伴している。

富岡市鞠戸原I遺跡(第12図294・295)

11号住居の295は北白川下層IIb式土器であり、諸磯b式古段階の土器と共に伴している。

富岡市上丹生屋敷山遺跡

図示していないが、192号住居では諸磯b式古段階に刈羽式土器が共伴している。同様に、諸磯b式中1段階に伴う例としては、142号住居と294号住居がある。諸磯b式中2段階に伴う例としては、158号住居と415号住居がある。また、115号住居からは、横位擦痕を施した土器が諸磯b式新段階と共に伴している。

下仁田町米山遺跡

図示していないが、25号土坑では口縁部に鋸歯状の浮線文様を2段巡らせる大木5式類似土器、横位擦痕を施した土器、諸磯c式古段階の土器が出土している。

列記した遺跡以外にも、伊勢崎市今井見切塚遺跡からは第8図200の格子目文が施された刈羽式土器が知られ、刈羽式土器は他にも多くの遺跡から出土している。また、覗ヶ森式土器に系統を引くと考えられる横位擦痕を施した土器は、少量ながらも県内全域に確認できる土器である。浮島式土器や興津式土器においても同様で、渋川市勝保沢中ノ山遺跡、高崎市黒熊遺跡、同市山名柳沢遺跡等、県内各地の遺跡で出土している。

5. 異型式土器の様相

これまで、群馬県内での前期の異型式土器を出土させている遺跡例を紹介してきたが、その様相についていくつか指摘しておきたい。

前期初頭期～前葉

花積下層I式土器と塚田式土器との共伴事例は多くあるが、上信国境に近い地域に顕著であり、赤城山南麓以東では皆無に近い。特に、長野原地域では、両者の区別をつけ難い土器も存在する。また、坪井遺跡での極楽寺式に酷似する土器の出土は、両型式の併行関係の確認だけではなく、北関東における北陸域の土器の存在、さらにはその中間域での存在が推測できることとなる。余談ではあるが、この坪井遺跡からは葉蠟石製とされる石製

品(「璜状頸飾り」谷藤2001)が出土しており、この石材が赤茶褐色(黄土色)：所謂カーキ色をしており、富山県極楽寺遺跡や新潟県寺地遺跡から出土している石製耳飾り等の石材に酷似している。一方、花積下層III式土器と木島VII式土器が共伴すると共に、木島式の特徴を併せもつ非結束羽状縄文の土器は、北陸地域にも散見できる土器であり、布目式土器の成立に大きく関与する可能性を指摘できよう。

続く二ツ木式期になると、住居形態においてもそれまでと大きく変化を成し、定型化した長方形や「コの字形石敷炉」をもつのが特徴(谷藤他2014)となる。特に群馬県内では顕著であり、関山II式の時期まで「コの字形石敷炉」の炉形態は継続する。二ツ木式と併行関係にある中越II式は、長野県長和町明神原遺跡II SB14号住居で両型式土器が確認されていることから、群馬県内での出土の可能性はある。同時期に併行する木島式土器についても、僅かではあるが楡木II遺跡で確認できる。さらに、布目式土器に関してであるが、富山県上久津呂中屋遺跡でも多量に出土するなど、その分布は広がりを見せており中、近年では新潟県でも信濃川上流域の遺跡からも出土している。長野県の北信域に接する長野原町地内の遺跡で確認できた布目式土器も、そうした一端の事例と思われる。現在、整理作業が進められている東吾妻町四戸遺跡でも、布目式を思われる底部を欠いたほぼ完形品が出土している。

関山式期になると、安中市三本木遺跡で関山I式土器と波頂下に垂下降帶をもつ無文の中越式や縄文を施した中越式土器が共伴している。同様な事例は、長野県真田町四日市遺跡17号住居にも見ることはでき、縄文を施した中越式土器の存在は知られていた(渋谷2005)。やはり、関山I式の長野県東信地域への浸透と、その逆の東信側からの流入の様がみてとれる。その様子は次の関山II式の段階になるといつそう強まり、関山II式期の神ノ木式土器の出土事例は数を増し、赤城山西南麓にまで見ることができる。併せて、清水之上II式土器の出土も明らかとなっている。また、僅かではあるが、新潟県の大湊式土器に近似する土器の出土も確認される。

前期中葉

関山II式期の神ノ木式の広がりは、後続する前期中葉期の前半には有尾式土器として黒浜式土器と共に県内全体に出土する。もちろん、有尾式土器は広域な広がりをもつ土器である。しかし、群馬県内での傾向は、県南東となる平野部においては黒浜式土器の比率が高いように思われ、有尾式の新しい段階になるとよりその傾向は強くなる。また、有尾式土器では口縁部文様は無文地に描かれるのが特徴であるが、縄文地に菱状や鋸歯状等の口縁部文様を描く土器が多くみられ、一つの変容のあり方

を物語っている。

この前期中葉期にあっては、有尾式中・新段階および黒浜式中段階に大木2a式土器が伴う事例を県北・東部に確認でき、東関東の植房式に類似土器も出土している。また、胴部最大径の位置が底部となる、根小屋式の器形にも通じ朝日C式にも見られる器形の土器が出土している。他に、僅かではあるが、静岡から神奈川県に主体をおく上ノ房式土器の出土が県西部に確認されている。そして、黒浜式新段階になると、北陸の朝日C式的な刺突施文に酷似する土器、密接した大型爪形刺突の北白川下層IIa式土器等を僅かにみることができ、さらに釈迦堂Z3式土器の存在も知られるようになってきた。特に、釈迦堂Z3式の抽出には、注意が必要であろう。

前期後葉

新潟県から長野県にかけて主体となる刈羽式土器は、その特徴の一つでもある格子目文が施される土器が諸磯b式古段階から諸磯b式中1・2段階に伴い、県内随所から出土している。むしろ、諸磯式に取り込んだ土器文様の感さえある。

北白川下層式に絡む土器の出土は、その変容した土器をも含め、かなり色濃い状況と言える。特に、上大屋類型の土器は、諸磯b式古段階から諸磯b式中1段階にその大半が伴い、県内各所に散見できる。

以前より出土の知られてきた浮島式土器は、諸磯b式中1・2段階に浮島II式土器が伴う事例が多い。また、諸磯b式新段階に、諸磯式の文様構成をそのままにロッキングによる横位爪形刺突を施文するといった、部分的な変容を描出した土器が一部でみることができる。後出の興津式土器に至っては、そのほとんどが諸磯c式古段階に伴い出土している。また、特筆できる事例に糸井宮前遺跡がある。興津式の中でも、福島県会津地域に見られる櫛歯状工具で施文される変容した興津式土器が糸井宮前遺跡に出土しており、諸磯c式古段階の時期に会津地域と片品川流域との直結したルートの存在があったことを意味している。

一方、大木式土器であるが、大木式の影響と思われる鋸歯状貼付文をもつ土器が、諸磯c式古段階にボタン状貼付文と共に施文され、普遍的に出土している。

さらに、北陸を主体とする蜆ヶ森式土器からの系統を示唆される横位擦痕の土器は、諸磯b式中2段階から諸磯c式古段階（多くは諸磯b式新段階から諸磯c式古段階）に伴い、各遺跡での出土量は少ないが県内全域から出土しており、今後も注意の必要な状況にある。

6. おわりに

群馬県内における縄文時代前期の土器型式細分・編年、

地域間の交差する広域編年は、数回に渡る縄文セミナーを通じて今日的に明らかとなってきた。周辺地域での新土器型式の設定もさることながら、地域間の土器の比較・検討は、新たな視点を生み出すのに足るものであった。そして、関東の編年枠で語られてきた群馬県出土の土器群であったが、その実態は南関東や東関東ともやや異なる状況にあり、北関東ならではの土器変遷、変容した土器、異型式土器との伴出関係が鮮明となってきた経緯がある。

前期初頭期において花積下層I式と塙田式土器が共にあり、北陸との関係が極楽寺式酷似土器や石製品の石材から興味深い。花積下層II式と木島VII式土器からは、東海から静岡県にかけた地域との関係、さらに木島式から変容したと考えられる薄手縄文施文の土器等、今後に問題を残している。前葉期においても、今のところ確認されていない中越II式土器や、近年散見する布目式土器、さらには中越III式土器や清水之上II式土器、そして大湊式土器等、注目すべき土器である。中葉期では、上ノ房式土器、朝日C式に見られる器形の土器、北白川下層式土器、そして釈迦堂Z3式土器の抽出が問題視される。後葉期では、周辺諸型式土器との比較検討もさることながら、蜆ヶ森式土器からの系統を示唆される横位擦痕の土器に注目する必要があろう。

以上、本稿では群馬県内から出土する前期の異型式土器の抽出と共に伴関係を確認しつつ、各時期の様相について触れてきた。その結果、各時期を通じて遠方を含めた諸異型式土器が僅かながらにでも確認することができた点からも、今後も異型式土器の抽出は必要不可欠なことは明らかで、さらなる抽出に期待したい。

本稿は、平成30年度公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団職員自主研究指定研究「群馬県内における縄文時代前期の異型式土器の実態研究」の成果の一部である。

主要引用文献

- 網谷克彦 1979「北白川下層式土器」『縄文文化の研究3』雄山閣 pp.201~210
渋谷賢太郎 2005「中越式土器への新視点」『歴史智の構想—哲学者鯨岡勝成先生追悼論文集—』鯨岡勝成先生追悼論文集刊行会 pp.13~24
瀧谷昌彦 2012「中越式土器から見た土器型式間の交渉」『縄文時代23』縄文時代文化研究会 pp.51~67
鈴木敏昭 1991「土器群の変容—例ええば、諸磯b式浮線文土器の場合—」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp.305~340
鈴木徳雄 1996「諸磯b式の変化と型式間交渉」『縄文時代7』縄文時代文化研究会 pp. 1~32
関根慎二 1995「諸磯c式土器以前」『群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要12』群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp. 1~28
関根慎二 2017「諸磯式後半期にみられる微隆起線施文土器」『二十一世紀考古学の現在』六一書房 pp.389~398
谷藤保彦・関根慎二 1985「群馬県における浮島式・興津式土器の研究(前)」『群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要2』群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.19~40

谷藤保彦・関根慎二 1986「群馬県における浮島式・興津式土器の研究(後)」『群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要3』群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.39~56

谷藤保彦 1999「花積下層I式土器とその周辺」『縄文土器論文集 一縄文セミナー十周年記念論文集』縄文セミナーの会 pp.79~105

谷藤保彦 2001「璜状顎飾り」について—中国新石器時代の視点から—『縄文時代12』縄文時代文化研究会 pp.161~172

谷藤保彦 2004「群馬県出土の神ノ木式土器」『群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要22』群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.95~107

谷藤保彦 2006「周辺地域における塙田式土器」『長野県考古学会誌118』一樋口昇一氏追悼号一『長野県考古学会』 pp.41~61

谷藤保彦・高橋清文・伊藤順一 2014「縄文時代前期前葉の「コの字形石敷炉」」『群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要32』群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.33~52

増子康眞 2017「草山式土器と上の坊式土器」『二十一世紀考古学の現在』六一書房 pp.365~375

松浦史浩 1990「浮島式土器の施文手法について」『東京大学文学部考古学研究室紀要13』東京大学文学部考古学研究室 pp.33~77

松田光太郎 1995「浮島式土器の研究」『古代探叢IV』早稲田大学出版部 pp.71~96

百瀬新治 1988「長野県内の諸磯b式土器」『長野県埋蔵文化財センター紀要2』長野県埋蔵文化財センター pp.62~75

森嶋 稔・鳥羽政之・鈴木徳雄・谷藤保彦・関根慎二・児玉卓文 1987『第1回縄文セミナー 縄文前期の諸問題』群馬考古学研究所

瀧谷昌彦・相原淳一・谷藤保彦・金子直行・下平博之・賛田 明・小熊 博史・山本正敏・佐藤典邦 1994『第7回縄文セミナー 早期末・前期初頭の諸様相』(資料集・記録集)縄文セミナーの会

下平博之・賛田 明・寺崎裕助・芳賀英一・植村泰徳・本田秀生・谷藤 保彦・小杉 康 1997『第10回縄文セミナー 前期中葉の諸様相』(資料集・記録集)縄文セミナーの会

関根慎二・中野 純・細田 勝・山本正敏・金井正三・網谷克彦・小杉 康・今福利恵・松田光太郎 1999『第12回縄文セミナー 前期後半の再検討』(資料集・記録集)縄文セミナーの会

黒坂禎二・谷藤保彦・細田 勝・堀江 格・賛田 明・瀧谷昌彦 2006『第19回縄文セミナー 前期前葉の再検討』(資料集・記録集)縄文セミナーの会

谷藤保彦・関根慎二・松田光太郎・寺崎裕助・賛田 明・稻畑航平 2010『第23回縄文セミナー 縄文前期浅鉢土器の諸様相』縄文セミナーの会

関根慎二・寺崎裕助・細田 勝・町田賢一・谷藤保彦・早坂広人・賛田 明・瀧谷昌彦 2011『第24回縄文セミナー 縄文前期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会

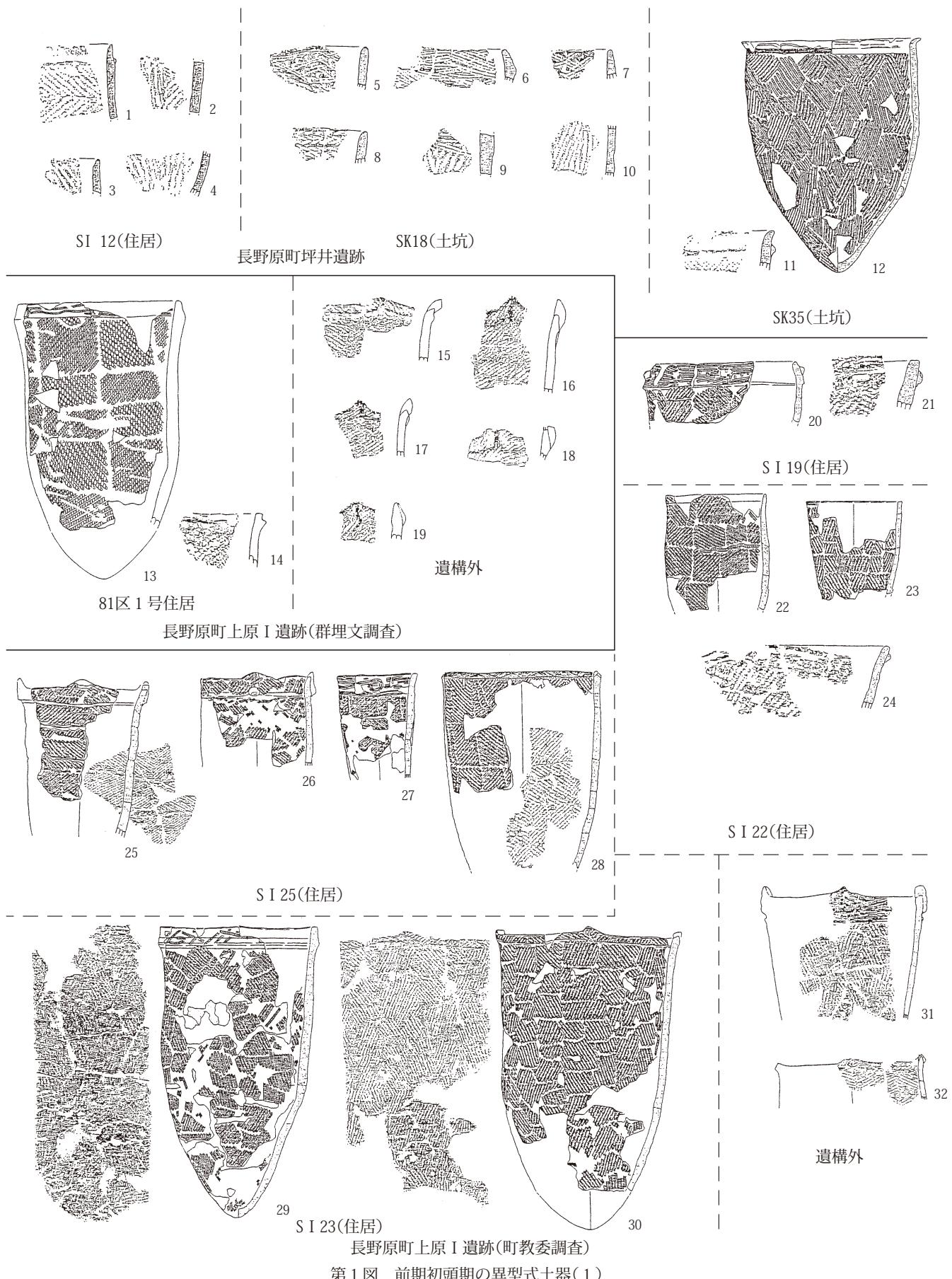
早坂広人・関根慎二・高橋清文・藤森英二・大石崇史・町田賢一・寺崎 裕助2016『第29回縄文セミナー 縄文前期後半の型式間交渉の諸問題』縄文セミナーの会

高橋清文・伊藤順一・綿田弘実・早坂広人・町田賢一・寺崎裕助・細田 勝2017『第30回縄文セミナー 縄文前期中葉の型式間交渉の諸問題』縄文セミナーの会

図出典文献

第1図1~12:『坪井遺跡II』2000 長野原町教育委員会
第1図13~19、第3図77・78:『上原I遺跡・上原III遺跡・林宮原遺跡』2015 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
第1図20~32:『林地区遺跡群』2015 長野原町教育委員会
第2図33・34:『長野原城跡・林中原I遺跡』2014 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
第2図35、第3図82:『三平I・II遺跡』2007 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
第2図36・37、第3図79~81:『居家以岩陰遺跡』2017 國學院大學
第2図38~45:『新堀東源ヶ原遺跡』1997 松井田町遺跡調査会
第2図46~52:『横川大林遺跡・横川萩の反遺跡・原遺跡・西野牧小山平遺跡』1997 松井田町遺跡調査会
第2図53~76:『三原田城遺跡・八崎遺跡・八崎塚・上青梨子古墳』1987 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

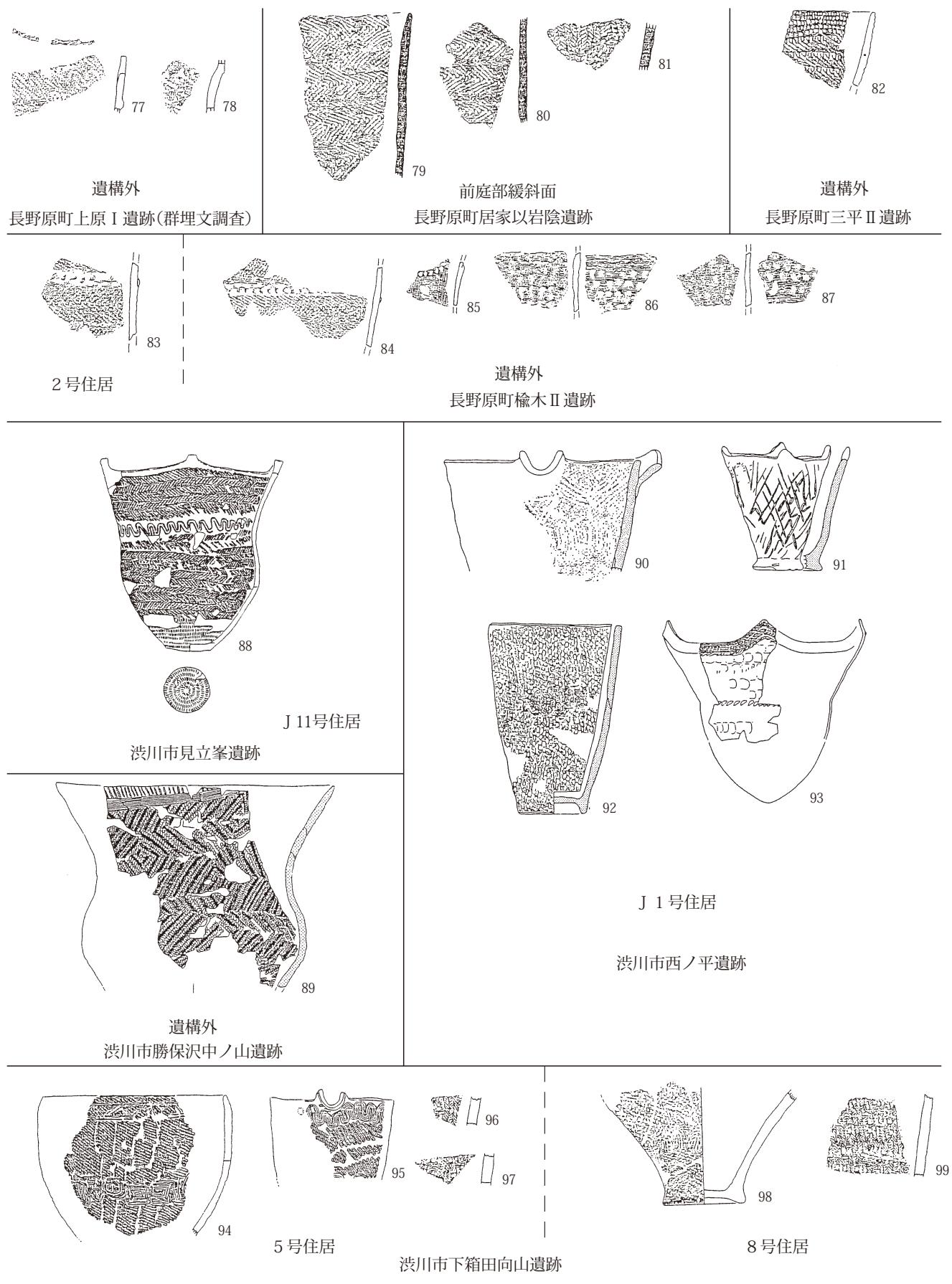
第3図83~87:『榎木II遺跡(2)』2009 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
第3図88:『見立峯遺跡II・滝沢日向堀遺跡』2003 赤城村教育委員会
第3図89:『勝保沢中ノ山遺跡I』1988 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
第3図90~93:『西ノ平遺跡』『北橋村村内遺跡VI』1998 北橋村教育委員会
第3図94~99:『下箱田向山遺跡』1990 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
第4図100~115:『東上秋間遺跡群発掘調査報告書』2003 安中市教育委員会
第4・5図116~129:『人見大谷津遺跡』2002 松井田町教育委員会
第5図130~146:『落合II遺跡2・平塚遺跡2・三本木II遺跡2・三本木III遺跡2』2016 安中市教育委員会
第6図147・148:『善上遺跡』1986 月夜野町教育委員会
第6図149~158、第11図253~257:『糸井宮前遺跡II』1986 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
第6図159~163:『中棚遺跡』1985 昭和村教育委員会
第7図164~169:『瀬戸ケ原遺跡(C区)』1994 大間々町教育委員会
第7図170~175:『横沢向田遺跡・堀越丁二本松遺跡・横沢向山遺跡・茂木二本松遺跡』1998 大胡町教育委員会
第7図176~183:『八城二本杉東遺跡・行田大道北遺跡』1997 松井田町遺跡調査会
第7図184・185、第12図292・293:『行田梅木平遺跡』1997 松井田町遺跡調査会
第7図186~194:『上北山遺跡・大牛下原遺跡』2017 富岡市教育委員会
第8図195~199:『大上遺跡II』2008 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
第8図200:『今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡』2005 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
第8図201・202:『清水山遺跡』1985 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
第8図203~209:『上泉唐ノ堀遺跡』2010 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
第9図210・211:『上泉唐ノ堀遺跡・上泉新田塚遺跡群』2011 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
第9図212~222:『上大屋・樋越地区遺跡群』1986 大胡町教育委員会
第9図223~228:『江木下大日遺跡』2006 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
第10図229・230:『芳賀東部団地遺跡III』1990 前橋市教育委員会
第10図231~246:『愛宕山遺跡・初室古墳・愛宕遺跡・日向遺跡』1994 富士見村教育委員会
第10・11図247~252:『広面遺跡』1994 富士見村教育委員会
第11図258~260:『三峰神社裏遺跡・大友館址遺跡』1986 月夜野町教育委員会
第11図261・262:『北貝戸遺跡・川上遺跡・小仁田遺跡』1985 水上町遺跡調査会
第11図263~267:『白井十二遺跡』2008 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
第11図268・269:『八崎日景山遺跡・分郷八崎上浅ヶ原遺跡』2015 渋川市教育委員会
第12図270~279:『神保植松遺跡』1997 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
第12図280~291:『中野谷松原遺跡』1998 安中市教育委員会
第12図294・295:『鞘戸原I・II・西原遺跡』1992 富岡市教育委員会



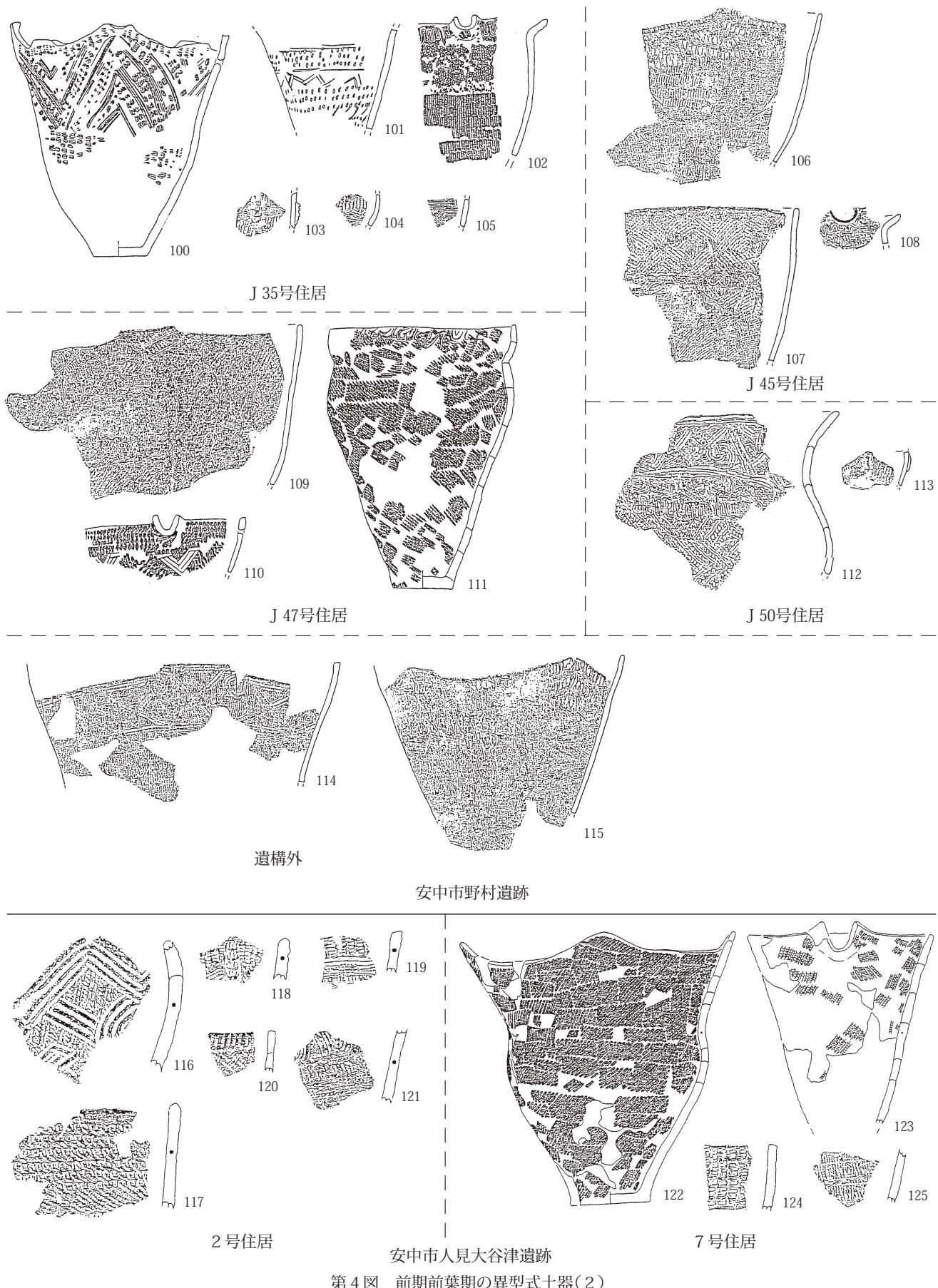
第1図 前期初頭期の異型式土器(1)

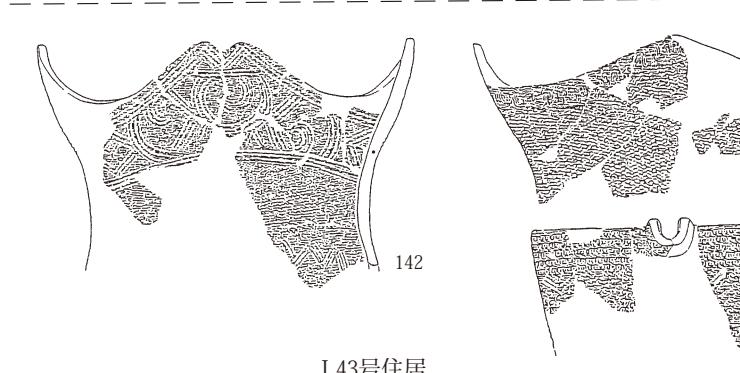
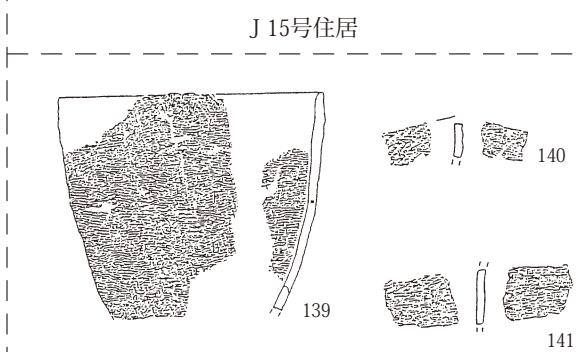
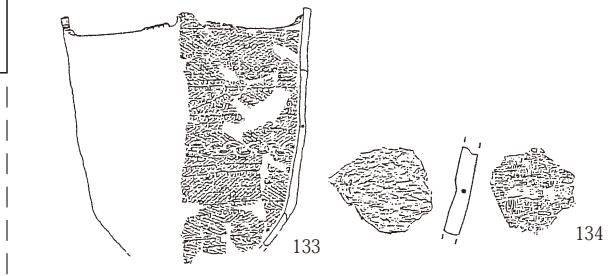
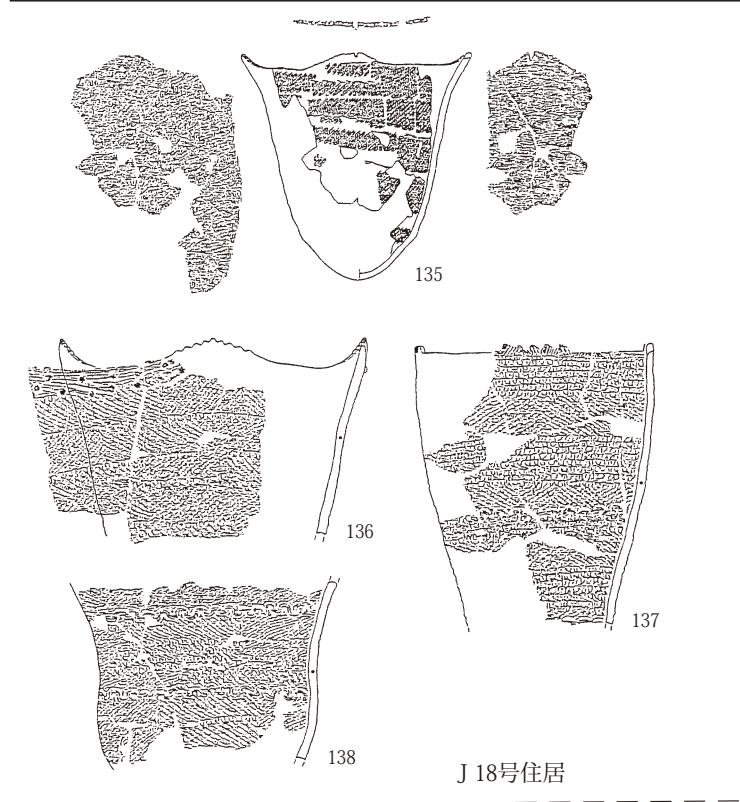
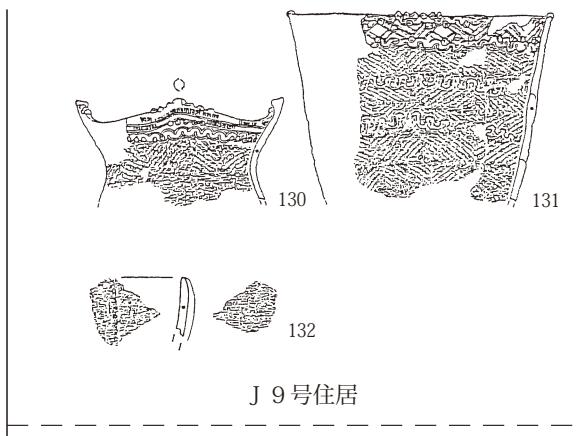
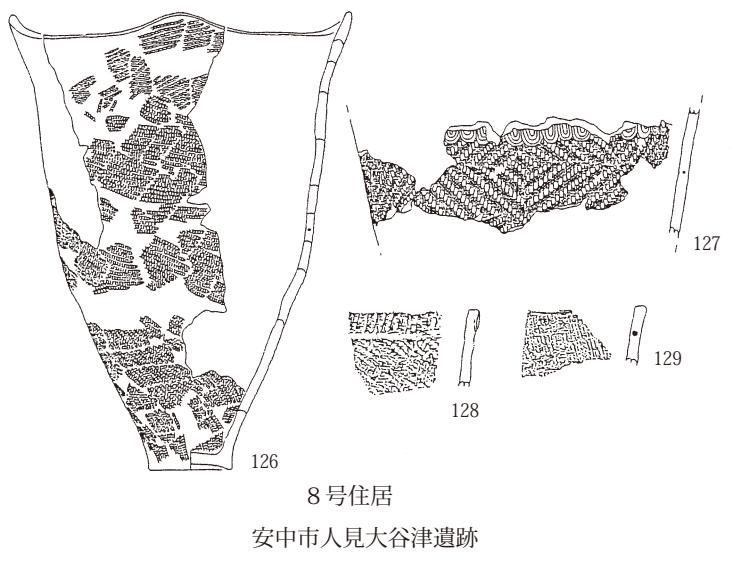


第2図 前期初頭期の異型式土器(2)

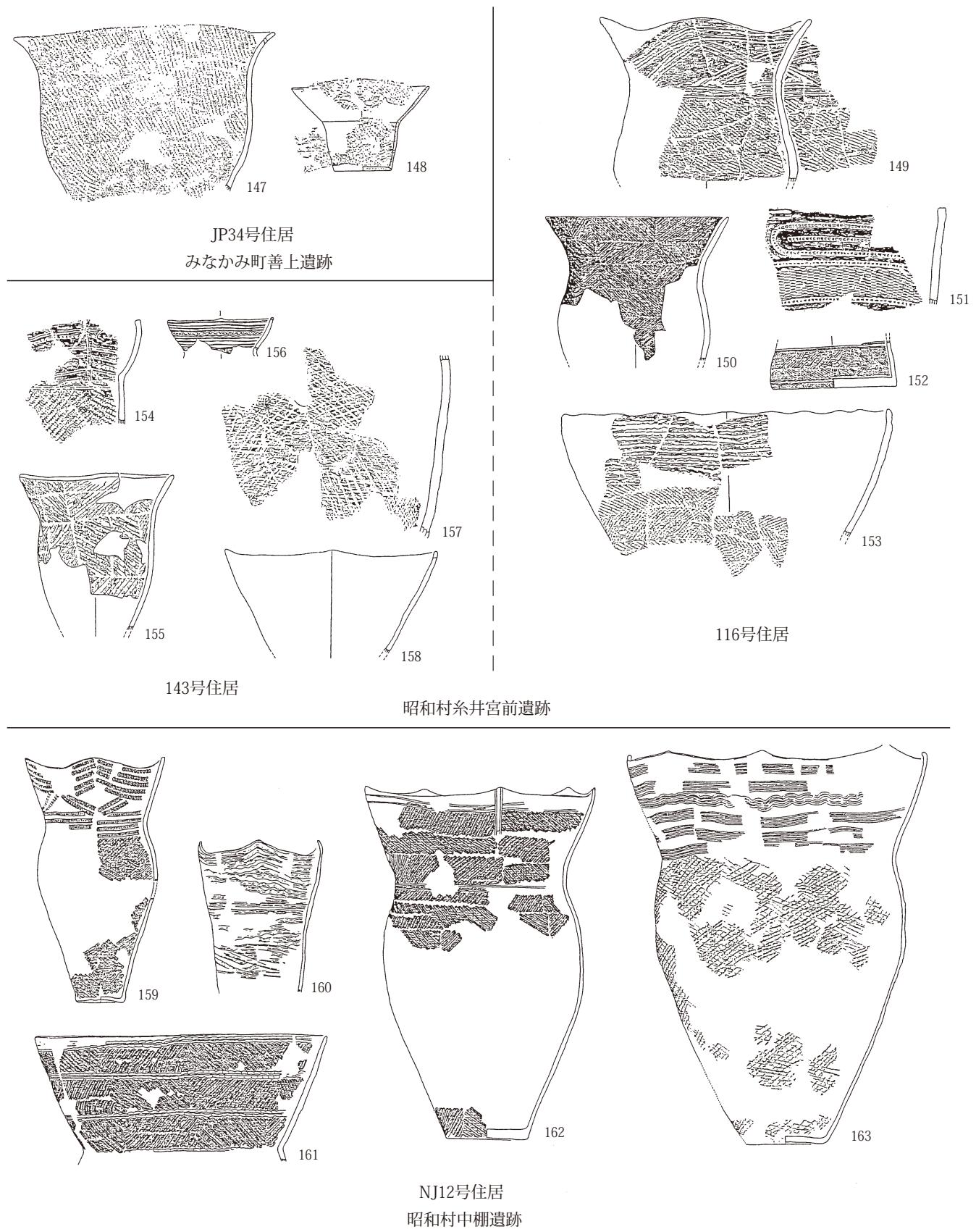


第3図 前期前葉期の異型式土器(1)

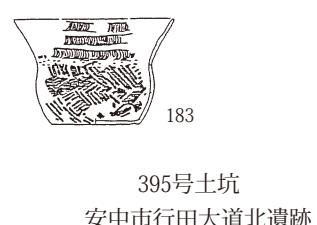
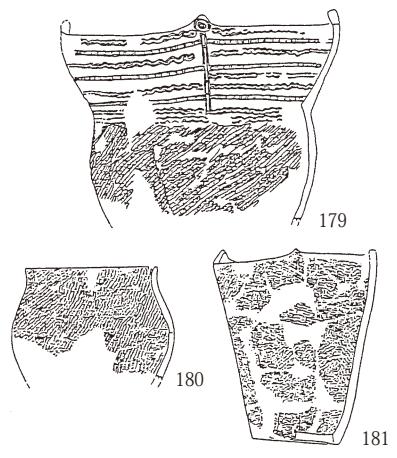
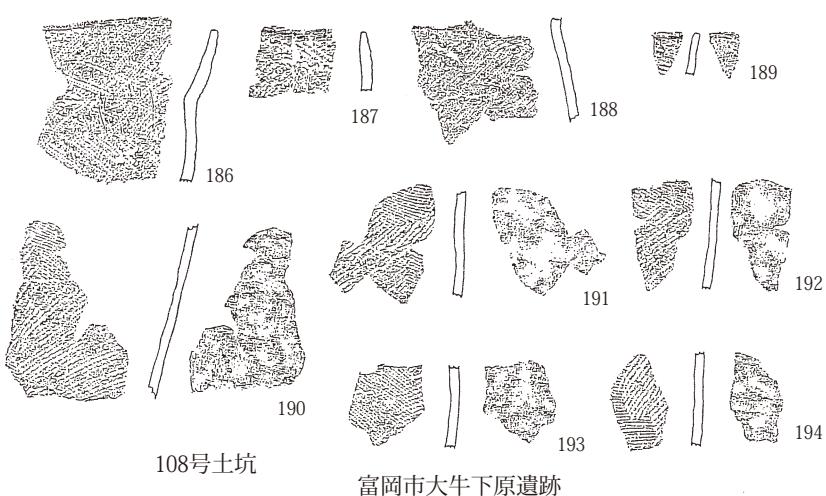
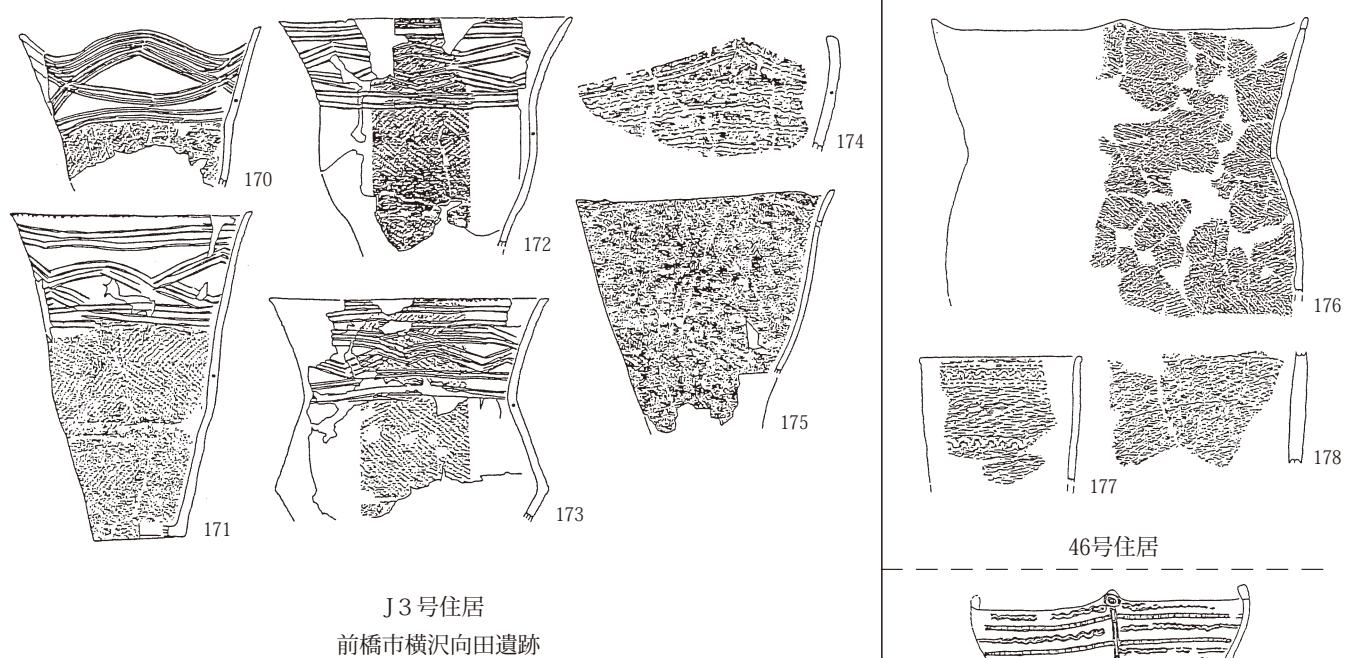
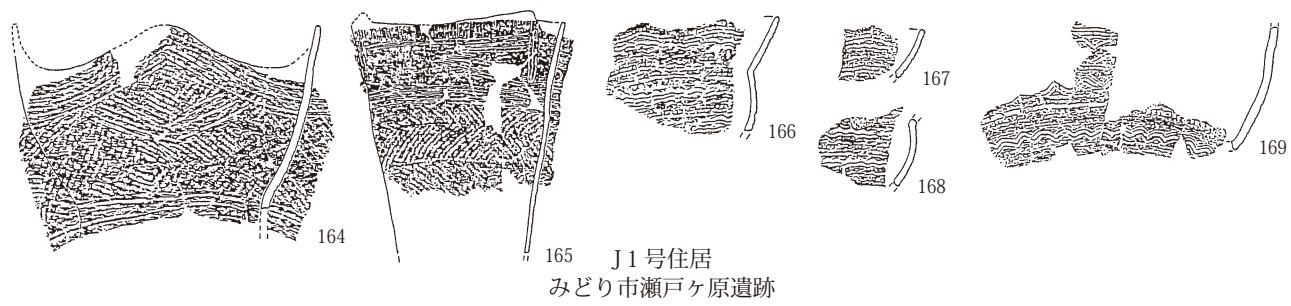




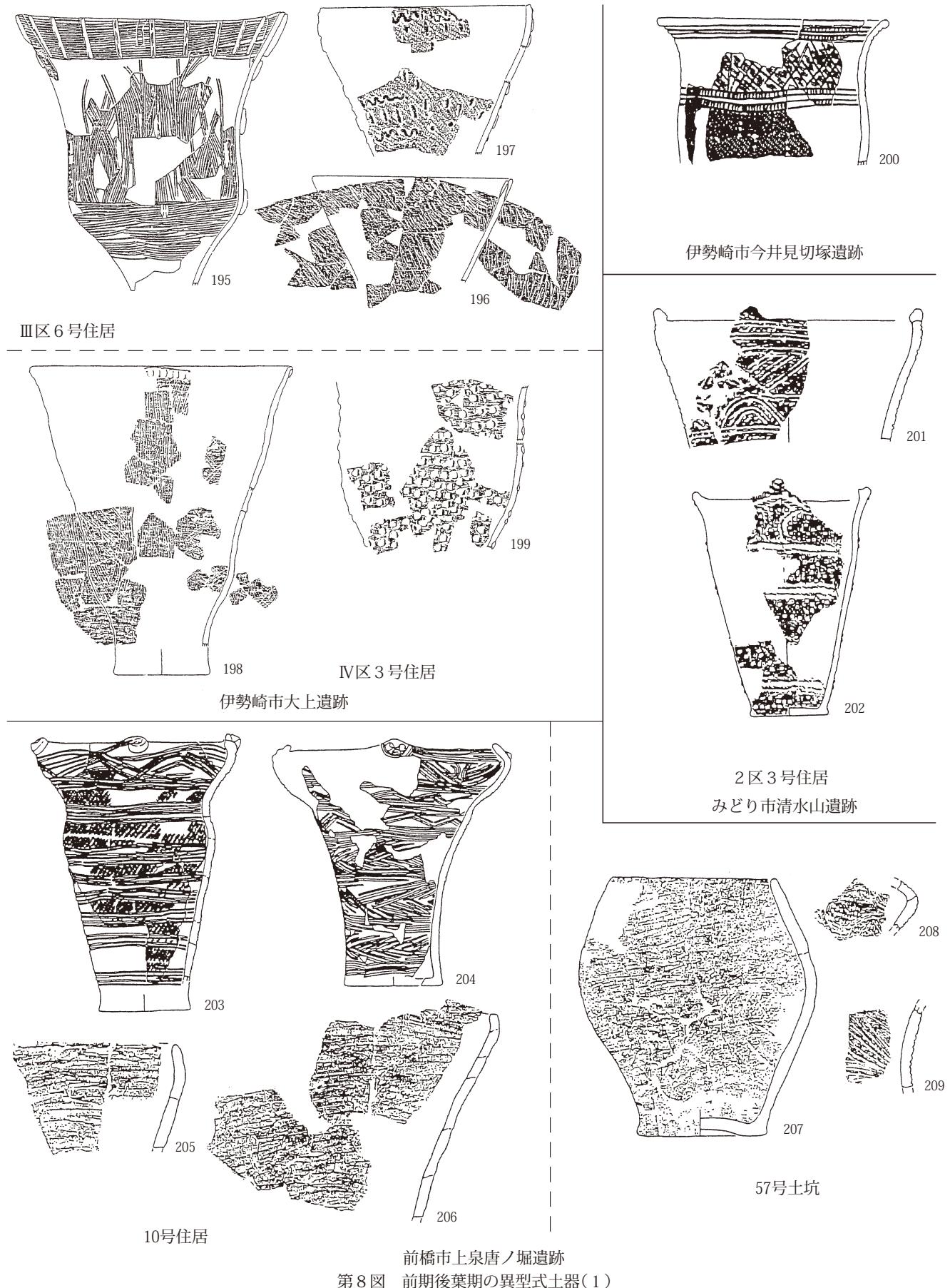
第5図 前期前葉期の異型式土器(3)

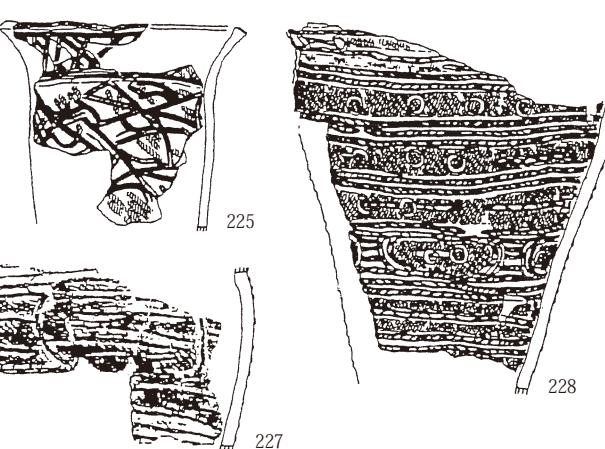
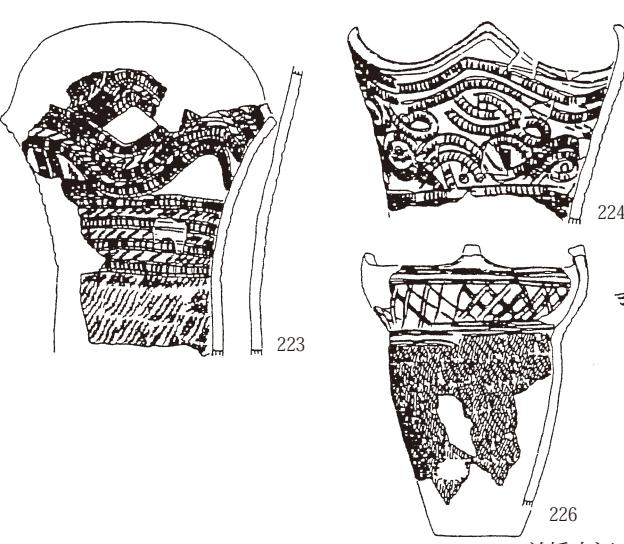
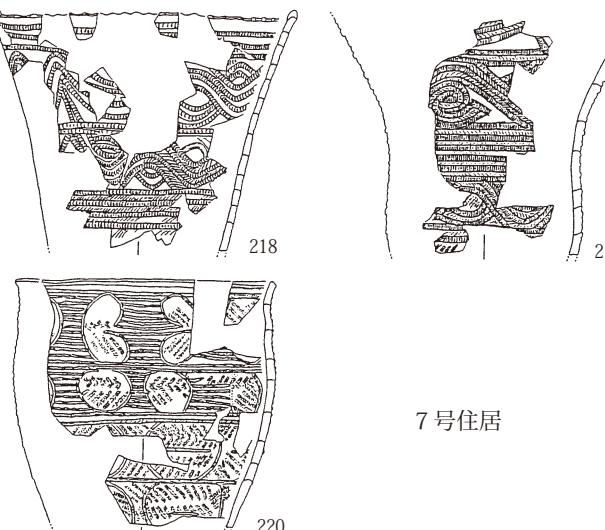
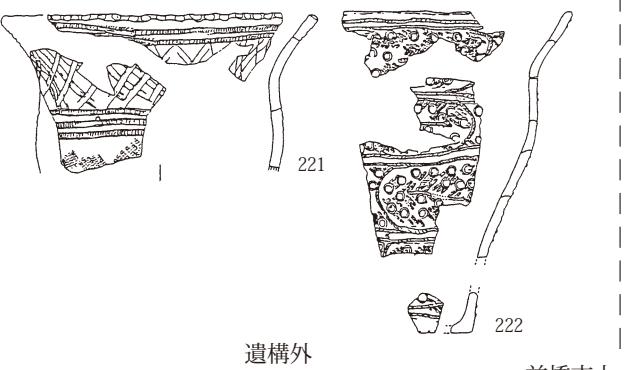
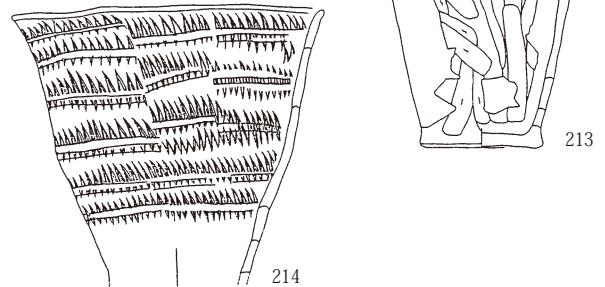
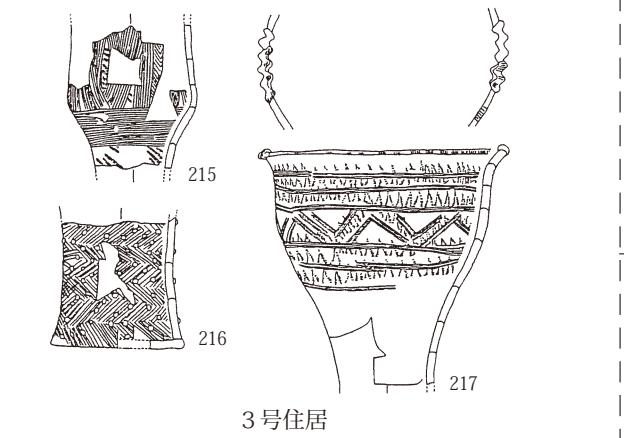
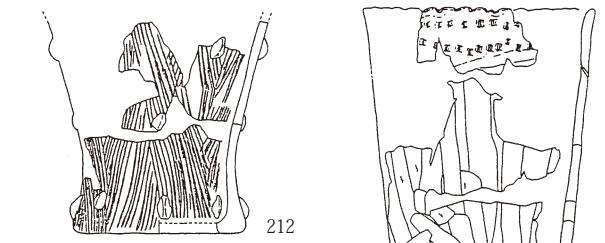
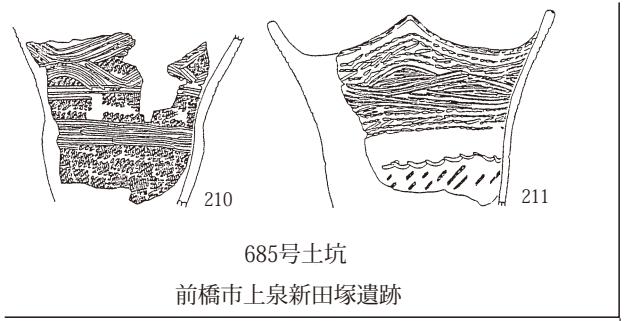


第6図 前期中葉期の異型式土器(1)

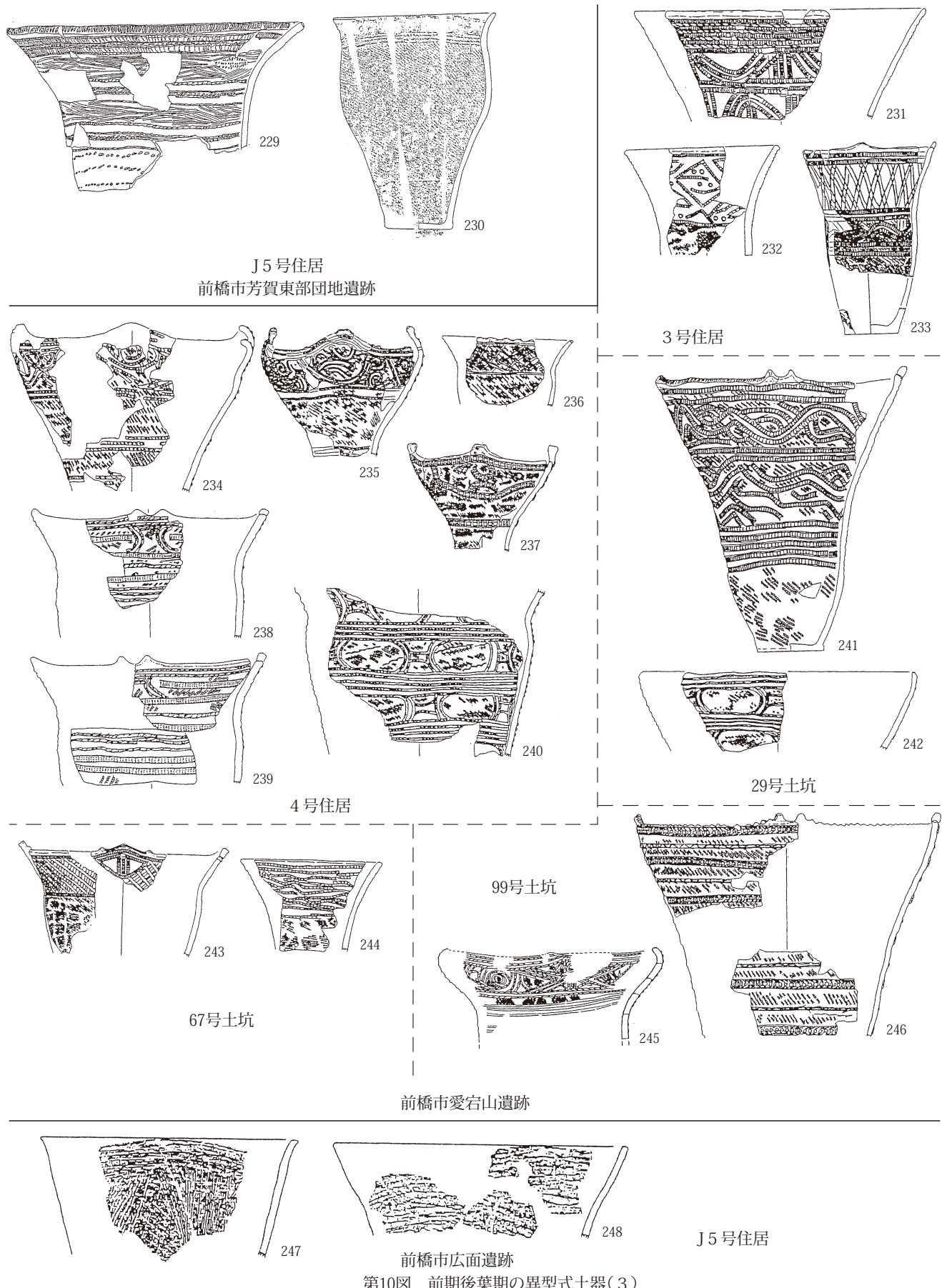


第7図 前期中葉期の異型式土器(2)

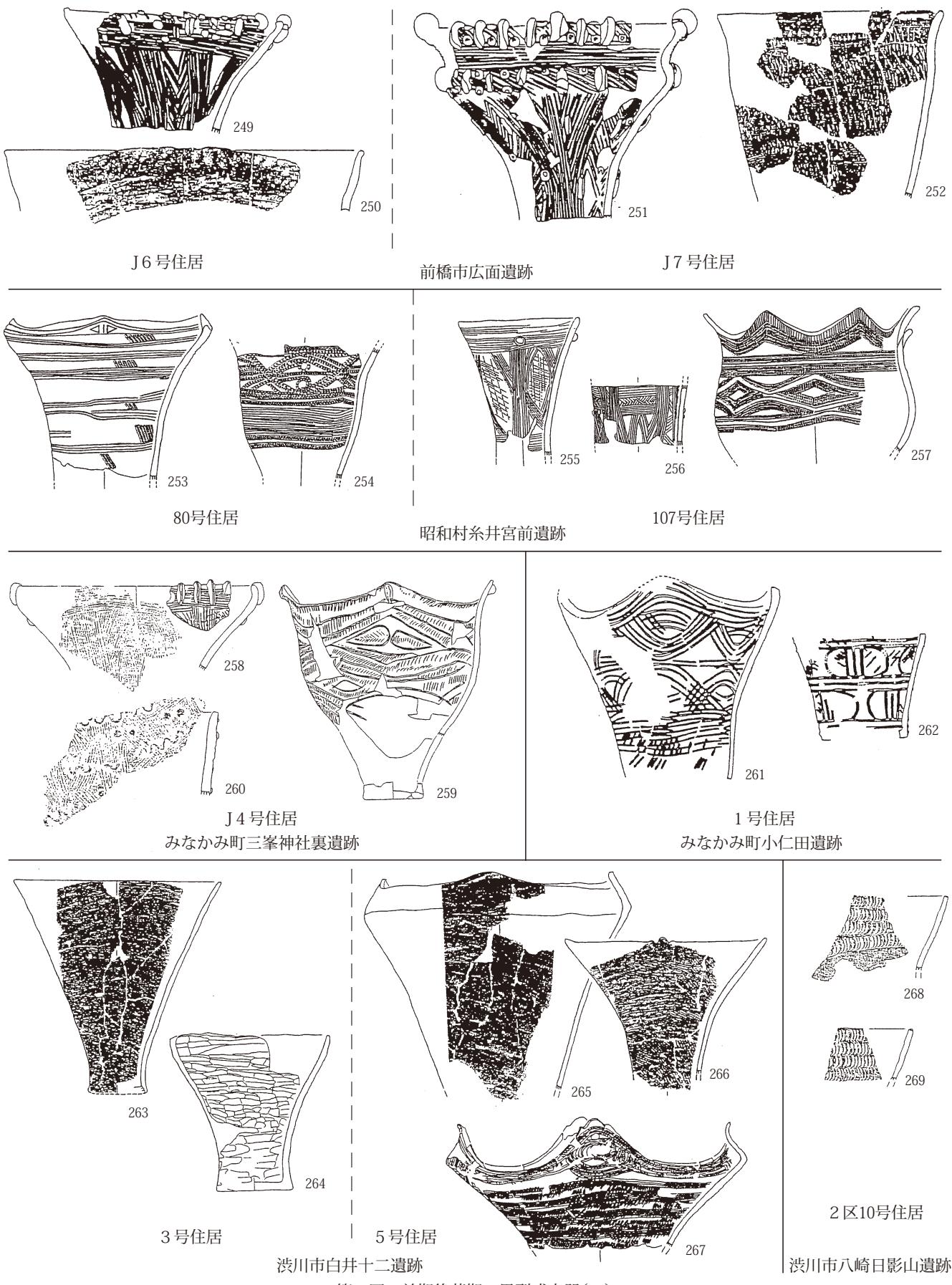




前橋市江木下大日遺跡
第9図 前期後葉期の異型式土器(2)



第10図 前期後葉期の異型式土器(3)



第11図 前期後葉期の異型式土器(4)

